

「百道浜の記憶」

村上 隆太

◇なぜこの話をするのか

なぜ私が百道浜のことを語ろうと思うに至ったかの理由であるが、現在、西南学院で昔の百道浜のことを知る人が少なくなったということがある。そのような状況を鑑みると、この地で人生78年のほとんどを過ごしてきた私としては、自分が知る限りにおいて、当時のことを伝えておく責任があるのではないか、と思った次第である。

振り返ってみれば、西南学院と百道浜は、ほとんど開学の頃から、密接な関係がある。現在も以前の百道浜に当たる所に西南学院小学校、中学校・高等学校がある。このように、西南学院と百道浜とは切っても切れない関係にあり、百道浜を抜きにして西南学院の歴史を語ることはできないと思うからである。

◇西新への移転

西南学院は1916年の創立当時は、大濠公園の北側に位置する大名町にあった。西新町に移ったのは1918年のことで、当時の本館、現在のドージャー記念館の南西の角の基礎部分には、この建物の着工をした年、「SEINAN GAKUIN 1920」と刻まれた礎石がある。



1920年に着工し、1921年に完成した旧本館

◇元寇防塁

大学体育館の南側に元寇防塁史跡がある。ここには元寇防塁とその歴史の説明板がある。国指定の史跡は他にも今津、生の松原などの海岸にあり、歴史的な解説が記されている。元寇史跡は博多湾一帯にあり、伊万里湾に浮かぶ鷹島にも史跡が保存されている。このような多くの史跡を見ると、当時、かなりの軍勢の元軍が北部九州に押し寄せたことを思い知らされる。元軍は朝鮮半島の人々を多く徴用して船舶を造り、周到に日本侵入を計画していたに相違ない。このことは韓国の釜山にある歴史資料館にもその記述がある。

西南学院では、大学1号館の工事中に元寇防塁の礎石の一部が発掘されたので、それを移築、復元して1号館の1階に展示している。この防塁は西側の元寇防塁史跡から中央キャンパスに続いており、それは、さらに東キャンパスでも、ドージャー記念館の北側の段差へと繋がっている。西南学院の敷地は、まさに元寇防塁に沿う形となっている。

◇砂浜と松林

私が西新小学校の生徒だった1945年頃は、樋井川の河口から室見川の河口まで広大な砂浜であった。現在のよかトピア通りは波打ち際で、その南側はかなりの幅の松林が砂浜に沿って続いていた。1926年に撮影された西新校地の写真があるが、一面松原である。



1926年 神学科の仮校舎

現大学東キャンパスにあった学院住宅に住んでいた私は、用があって今の大学中央キャンパスに行くときには運動場を突っ切り、松林を通り抜けることになったが、鬱蒼とした暗い松林の中でフクロウが「ホウ、ホウ」と鳴いていて気味が悪く、駆け足で通った記憶がある。

今では、キャンパス内の松の木も随分少なくなったが、1960年代には、松の木をできるだけ切らないようにとの福岡市の要請もあり、西南学院ではその保存に気を配っていた。

西新小学校の北側の塀を超えると、塩田があった。海水を引いてきて塩を作っていたのだが、海水を干して作った塩で醤油も作っていた。この醤油工場（「マツジユウ醤油」）は、その後移転し、防塁前の旧通り、今の早良郵便局の東側にあって、その高い煙突が遠くから見えた。工場も随分後まで営業していたので、横を通ると醤油の匂いがした。

◇学校の舟

キャンパスが百道浜に接していた西南学院は、何かと海との繋がりがあった。中学校では、櫓で漕ぐ木造の伝馬船を一艘もっていて、生物の授業では、校外授業として理科の先生が生物部クラブの生徒4、5人を乗せてその舟を漕ぎ、西公園沖の鷗来島まで海の生物探索に出かけたこともあった。また、学校の行事で遠泳大会が行われた折には、この舟が救難用に付き添って行っていた。

◇飛行場

戦後間もない頃は、砂浜に戦時中の遺物が残っていて、旧日本軍の戦闘機が1機そのまま放置してあるのを見たことがある。それはその後撤去されたが、百道浜に飛行機が離着陸するくらいの土地があったかと疑問に思ったのを覚えている。福岡市の市史に記載されているところによると、百道浜の樋井川寄りには水上飛行機の飛行場があったということであるが、私には百道浜飛行場の記憶はない。

◇物騒なもの

現在の百道中学校の運動場の北側にあたる場所の砂浜には、終戦直後、埋められた木箱があり、そのなかには機銃弾が一杯詰まっていた。軍が終戦とともに慌てて埋め

たのだろうが、ピカピカの真鍮の銃弾がきれいで、それで遊んでいた子どもが指を吹き飛ばされたこともあった。

物騒とは言えないかもしれないが、同じ場所に路面電車の廃車が放置されていた。子どもたちはそれに乗って運転のまねごとをして遊んでいた。ただ、それは公衆便所の役割も果たしていたので、汚い遊び場だった。

◇百道海水浴場

1945年頃から、西南学院の北側の砂浜一帯は、市民の海水浴場となっていた。沖には飛び込み台がおかれおり、少し泳げる子どもは頑張ってそこまで泳いでいった。夏には大勢の海水浴客がやってきて賑わった。アイスクャンディー屋さん、貸しボート屋さん、休憩場などが並んでいた。



海から臨む西南学院と西新小学校（1936年）

百道浜は、海水浴場であったと同時に、貝掘りの場所でもあった。海に入れる時期になると、みんな腰まで水に浸かってつま先で石のように感じる所をちょっと潜って手探りでそれを取り上げると、手のひら位の白貝が取れた。綺麗で、しかも食べて美味しい貝だった。持って帰ってお味噌汁にいれて食べたものだ。樋井川の河口ではアサリ貝も採れた。アサリ貝は多少水が汚れた河口に生息するので、百道浜よりも樋井川河口の方が条件が良かった。その他、マテ貝もここで採れた。折れたこうもり傘の骨を海中の小さな穴に突っ込んで引っ張り上げると、長いマテ貝が引っかかって上がってきた。貝も百道浜の恵みの一つだった。

この頃の様子が、福岡市の『市史』に書かれていることを最近、資料センターのスタッフに教えてもらった。そこで田鍋隆男氏が書かれた「歴史万華鏡」の掲載文の17、18回に詳しく述べられている。私が知らなかったこともあり、参考になった。

百道浜の西側には、室見川がある。今でこそ百道浜から橋を渡って愛宕浜まで行けるのだが、当時は橋がなく、百道から一旦202号線（旧電車通り）まで戻って愛宕神社の横を通って海岸に向かわなければならなかった。戦時中からだったか、ここに姪浜炭鉱があり、ボタ山があった。比較的最近まで、小戸のヨットハーバーの北側にボタ山が残っていた。

◇百道浜のある事件

百道浜は、百道の埋め立てが始まる前まで、ゴミなどは全く漂着していない綺麗な白砂の浜だったが、私が中学生の頃だったか、砂浜に人だかりがしているので何だろうと寄ってみると、波打ち際に人が打ち上げられていた。チマチョゴリの女性で、体も衣服も乱れていない状態で砂に横たわっていて驚いた。多分、博多湾内の百道に近いところで溺れたのだらうと、推察した。70年も前のことながら今でも鮮明にその様子が記憶にある。百道浜で水死体を見たのは、後にも先にもこの時だけである。

◇地引網

戦後、父が復員して西南学院中学校の教員をするようになり、家族はキャンパス内の学院住宅に住んだ。ここは海から5分の近さだったので、春、夏、秋と良く海辺で遊んでいた。沖合で漁をしていた舟が、百道浜に舟を着けて地引網を引いていたが、そのポンポン蒸気音を聞きつけて、私は朝早く家を出て、浜で網を引く手伝いをした。小学生の手伝いなど知れたものなのだが、漁師たちは「はい、お駄賃」といって、魚を私のバケツに放り込んでくれた。

穏やかな夏の朝に、波打ち際の2メートルくらい先に小石を投げると、4～5センチくらいのイカの子がスーッと波打ち際に乗り上げてきて、私はそれをつまんでバケツに投げ込んだが、また石を投げてはポイ、と何匹も取ったものだ。百道浜は自然が豊かな海辺だった。

◇相撲部屋の宿舎

大相撲九州場所がある時期には、百道浜に何軒もあった「海の家」が相撲部屋の宿舎になっていて、お相撲さんたちは砂浜を走ることが運動になっていた。大相撲が近くなると西南や西新界限には相撲取りの姿が良く見られた。最近は相撲部屋も近くに来ないようにあまり見かけない。西南学院大学の陸上部もピオネ荘などの海の家で合宿をしていた。ピオネ荘は小さくなっているが、まだ今川橋のたもとの南側にある。

◇刑務所

百道浜ではないが、この地域の南は藤崎になる。ここには巨大な刑務所があった。今の西市民センターの場所に当たるところになる。高いレンガ塀に囲まれ、その四方の隅の高いところに監視所があり、銃を持った監視が常駐していた。重苦しい雰囲気地域だった。

その刑務所の前的大通りに面して、広い土地があり、そこに畑が作ってあって、受刑者たちが刑吏の監視のもと作業をしていた。道路を隔ててコンクリートの建物があったが、ここが死刑囚の処刑場だと後になって聞いた。知る人ぞ知る目立たない存在だったが、私はこの横を通るのが怖かった。藤崎刑務所が糟屋郡宇美町に移転した跡地に、西市民センターができた。

◇百道浜の埋め立てと西南学院中学校・高等学校の移転

1982-83年、福岡市は唐人町から室見川にいたる海岸の埋め立てを開始した。福岡市から西南学院に対して、埋立地の一部を購入してくれないか、という打診があり、かなり広い面積だったので、学院も躊躇したのだが、熟慮の結果、将来を考えると十分役に立つと考えて購入を決定した。かなりの資金が必要だったが、学院はあちらこちらから総額40億円を調達して、埋立地の南東部、西南学院に近い7万4千m²の土地を購入した。借入金はずでに全額返済している。この土地は、その後、百道浜校地として、中学校・高等学校の敷地となったのは周知の通りである。

1999年、学院は城南区千隈の土地を福岡市に総額108億円で譲渡し、その代金によって中学校・高等学校を新しい百道浜の校地に移転させ、その跡地は学院、大学が使用することとなって現在に至っている。



小学校も百道浜に開校した（2010年）

私が知っている70年前の百道浜は、その後「よかトピア通り」として一大発展を遂げたのであるが、昔の百道の海岸はマリナタウンの北に僅かにその名残を残している。振り返ると、時代と共に百道の浜は遠くなり、というのが私の感想である。

以上、西南学院の歴史の一部でもある百道浜について思い起こすままに記した。

この原稿は、2016年8月30日に北九州ロイヤルホテルにおいて西南学院事務職員夏期修養会で行われた講話を基に、紀要に掲載するため改めて執筆を依頼したものである。